

## パワー・シフト

佐橋 亮

2010年4月に本学に着任して以来、ワシントン、ブリュッセル、北京、台北、ソウル、バンコク、ハノイ、ニューデリー、シンガポール、キャンベラと、出張を繰り返している。国際学会や会議での報告に加え、現地の政府高官や有識者にアポを申し入れてインタビューをすることも多い。必然的に目的地には首都が多いのだが、アメリカでは地方都市を回る機会も多く、テキサスA&M大学での講演を終えた晩に東日本大震災発生の一報を受けたことは忘れ難い。



テキサスA&M大学ブッシュスクールにて講演

国際政治学、とりわけ安全保障を専門にしているため、世界で何が起きているのか、何が話し合われているのか、「相場観」を身につけるためにも出張は欠かせない。インターネットで多くの情報が取れる時代にはなったが、信頼できる情報源を確認するためにも、また実務家のもつ認識を炙り出すためにも、実は出張は依然として大切な役割を果たしている。

世界の話題は、日々変わる。この夏を過ごしたワシントンでのある平均的な一日は、朝にリビアと南

スーダンについて最新の情報を確認した後に、アジアから訪問中の政治家の講演会に参加し、午後は米中関係の動向についての最新のコメントリーをネットで探しながら、南シナ海における領土紛争とエネルギー



ギー・ナショナリズムに関する報告書にマーカーを引くといった具合だ。昼食や夕食に加えて、ハッピーアワーと呼ばれる夕方の時間帯に、バーでビールを片手に、情報交換も兼ねて友人のネットワークを広げることもワシントンでは欠かせない。毎日大量の情報が生み出されるなかで、時代の潮流をつかみ、分析するための新しい視角を作り出すことが国際政治学者の仕事であり、また大きな挑戦となっている。

さて、この10月に私を含む5名の若手研究者で、三カ年度にわたる研究成果を1冊の報告書にまとめた(『ルール推進国家・日本の国家安全保障戦略—パワー・シフトとグローバル化、リソース制約の時代に生きる—』笹川平和財団、2011年)。海洋、エネルギー、マクロ経済の専門家をチームに迎え、我々の報告書は学術的な知見を政策に応用するための、重要な手がかりを読者に与えるものと自負している。

我々は、日本と世界を取り巻く「戦略的潮流」を5つに整理している。パワー・シフト、暴力的トランスナショナルアクター(国際テロリスト集団、海賊等)の台頭、資源・エネルギー・食糧をめぐる争いの激化、脆弱国家の動揺、そしてナショナリズムの高揚である。とりわけ、パワー・シフトには世間の関心が高まっていることもあり、紙幅を割いた。



2011年5月、北京大学におけるオーストラリア国立大学、南洋工科大学との合同シンポジウムにて報告

言うまでもなく、中国やインドなど新興国は2008年のグローバル金融危機以後も世界経済を牽引している。とりわけ中国は、遅くとも2020年代後半には米国に名目GDPにおいて並ぶと予測される。重力モデルを使った試算では、2030年には日本の貿易量の4割以上は中国となる（現在も輸出入とも最大の相手国だが、割合は2割程度）。経済、金融における対中依存は、周辺諸国も米欧も変わりはない。さらに、中国の軍事的能力は著しく伸びており、各国の対中依存の進展と相まって、中国の政治的影響力は増大しているのが現状だ。

だからこそ、というべきだろう。中国の台頭とともにアメリカをアジア太平洋にいかにか位置づけるべきか、この数年での議論の盛り上がりには目を見張られるものがある。この地域の中小国は、いずれの大国にも与せずを方針とし、自らが主導する地域主義にこだわってきた。だが、太平洋戦争以後も残つ

たアメリカの圧倒的なパワーがこの地域の安定と繁栄を作り出したことは、誰の目にも明らかだった。

十年を数える「テロとの戦い」、財政状況の悪化によって、アメリカは疲弊し、内向きな議論と政治の停滞に苦しんでいる。そして中国が各国に互恵的な秩序を作り出せるのか、この重要な問いには、

誰も確信を持って答えられない。これまでの国際秩序に変革を迫るかもしれない中国の台頭と、覇権国アメリカの揺らぎ。冷戦終結や同時多発テロは、たしかに世界を変えたが、より構造的な変化が今起きようとしている。パワー・シフトが作り出す多くの知的挑戦に、我々は今、取り組んでいる。

(法学部准教授)



2011年9月、ワシントンDCで日米関係に関するセミナーの司会をつとめる